



泳ぎの太郎

なにがし

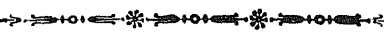
むかし〜或處に太郎といふ小供がりました、太郎には二郎といふ小さい弟がありまして、この二人はめづらしいほど仲の善い兄弟でありました、或日のこと太郎は二郎を連れて海邊にまゐりました、處がこの日は丁度好い天氣で、ぽか〜と暖い日が照つてまことに善い氣持です、見渡すと海の上には波も立たず、わちらこちらには白い帆かけ船や小さな漁師船が一艘二艘また三艘と、まるで白い鳥の翼の様にまた木の葉の様にも見えるのです、そして其海の沖の方は青々と晴れ渡つた大空と一緒になつて、海だか空だかわかりません。ア、きれいなア、きれいだ、あの海は全體どこまであるのだらうなどと、二人は頻りて感心をして居ましたが、二郎はふと其海邊の岩の陰に誰だか乗り捨て、行つた一艘のボートを見付けました。大よろこびで「アッ兄さんボートがあるよ、ウマイ〜、サア兄さんボートに乗りましよう、乗せて下さい」と言ひました。太郎も「これは善いものが見付つた」といふので直と二人は其ボートに乗りました。太郎は、ボートがなかく上手です。一ツ二ツ一ツ二ツと掛聲をしながら

ゆる／＼と漕いで、だん／＼沖の方に出て行きました。沖に出て見ると其景氣の美しい事、海邊で見ただけより一層です。今まで前の方だと思つた漁師船は、いつの間にか後になつて居ます。小さいと思つた白帆がだん／＼大きく舟までも見える様になつて来ました。走るは汽船か軍艦か泊るは漁師の釣船か……など、二人で聲を合して唱ひますと、其歌が、ヒロ／＼とした海の上をどこ迄も、聞えて行く様で、其善い氣持つてはありませぬ。處が向ふの方に誰が乗つて居るのですか同じ様なボートが一艘見え出しました。なかく早く漕いで居る様です。「兄さん、あのボートと漕ぎつことをしましうや」「ア、そうだそれが善い」と、太郎は大急ぎで力一ぱい漕ぎ出しました。二郎も側から、一生懸命「サア、早く／＼」といので、二人はもう一緒になつて、ヨッシ／＼と掛聲ばかりをして漕ぎました。しかし向ふのボートも矢張一生懸命と見えてなかく早い、二人はまるで夢中です。處が不意にドーンとひどい音をして二人のボートはさかさまにヒツクリ返りそうになりました。

四十二
ボートは海の中につき出て居た大きな岩にブツカツたのでした。ハツと思つて太郎はボートにつかまらしたか、漸くしてふと見ると、ボートの中に二郎が居ませぬ、サア大變、二郎は海に落ちたのです。太郎は直ぐ着物をぬいで飛び込みました。二郎はとあちこち尋ねましたけれども其邊には見えませぬ。「帽子も着物も見えませぬ、二郎さん次郎／＼」と呼んで見ましたが、返事もありません。太郎は困まりましたか、でもどこかに二郎の居らない筈はない、どうしても探さないではといふので、これから太郎は海の中をだん／＼と泳いでまわりました。そして、大きな聲をして「二郎さんは居らないか、太郎の大事の二郎さん、二郎さん、二郎さん」と申ながら泳ぎました。づん／＼まわります内太郎は一番に鯛に出くはしました。眞赤な顔をして大きな鯛です。太郎は若しかと思つて「鯛さん／＼、お前は二郎を知らないか」と訪ねますと鯛は白い歯をむき出して「知らないよ」と怒つた顔をして行つてしまひました。次には鯖に出くはしました。すました顔をして之も可なり大

きな鯖です。太郎はまた「鯖さん〜、お前は二郎を知らないか」と申す、
 「やはり知らないよ」と言つたきりて、ずん〜行つてしまひました。今度は鯉に遇ひました、鯉は黒背の着物をきて、なか〜元氣です、太郎はまた「鯉さん〜、お前は二郎を知らないか」と申す、
 鯉は正直そんな顔をしてお前の大事の二郎さんは乙姫様のお小使と申された、太郎は何のことだか少し分らないと思ひましたが、乙姫様といふは龍宮城に居らつしやると聞いたから之はさつと二郎も其龍宮といふ所に居るに違ひないと思ひまして又力一つはい泳いでまゐりました、もう何程來たか分らないと思ふ頃にふと眼の前に美しいお城の様な所が見えました、繪で見た唐門や珊瑚の柱や鶴の屋根やどうも眩しい程のきれいさです、之こそ龍宮といふ所に違ひない、と太郎はよく〜見ますと其立派な唐門の側に章魚入道が立つて居ます。これは門をばらして、一つ聞いて見やうと太郎は急に氣を苛つて「章魚さん〜、此處は何といふ所、お前は二郎を知らないか、と申しました。

章魚は得意そうに大頭をふり立て、「太郎よ此處は龍宮だ、二郎は私が拾つたから乙姫様のお小使にしてしまつたよ」と申す、太郎は始めて譯がわかりましたが、何しろまあ善かつた、二郎は無事だ、と安心をして、しかし章魚さん私は二郎の兄だから、どうか返して下さい」と申されたか、章魚は「いけな〜、たいではどうして返されない」と申す。「それではどうすれば善いのです」と申す、「私と泳ぎつくらをしてお前が勝つたら返してやらう」と申された、太郎は仕方ありません。ではといふので章魚と泳ぎつくらをいたしました。處が章魚は八つ足で、それに格別大きな章魚でしたから、どうして太郎は叶ひません。いつの間にかずん〜追ひこされてしまひまして、呼んでも影が見えなくなつてしまひました仕方がないから太郎は泣く〜元の道を泳いでたい一人じほ〜として家に歸りましたが、サア太郎は之からどうしても泳ぎを上手になつて、あの章魚に勝たなければなりません、朝から晩まで泳ぎの稽古をして脊中や手足の皮までものはげる様に



なりましたが、決して廢めません。誰が何と言つてももう一生懸命になつて泳いで居ました、するとえらいものです。其太郎の上手になつた事誰だつて叶ひません。まるで河童の體です。それで皆は太郎のことを「泳ぎの太郎」「泳の太郎」と言つて感心する様になりました。そこで、もう大丈夫だらうと泳ぎの太郎は是から二郎を取返しにまゐりました、何時かの海の中を又すん／＼と泳いでまゐりました。今度も鯛だの鰯だの、まだいろ／＼の魚に遇ひましたが、皆太郎のわたりまく泳ぐのに驚いて見て居ました。

さて、また美しい龍宮城につきましましたが、見るとやはりいつかの章魚が門番をして居ます、うれしくて太郎は「章魚君、今日こそ大丈夫だよ、早く泳ぎつくらをして二郎さんを返したまへ」と大した元氣です。章魚はどうも此間とは大分ちがうと思ひましたが、仕方がありませんからではそうし様と一ツ二ツ三ツで泳ぎ出しました。

「どうも恐ろしく善く泳ぐじやないか、彼は何だらう」でも章魚には叶はないだらう「いや大分早

い様だよーなどと先程の鯛だの鰯だのがみんな寄り集つて来て見物をしました、乙姫様も何だか騒がしい様だと思ひになつて城のお天守から御覽になつて居ます、章魚は尙更一生懸命どうでも勝たなければと例の八つ足ですむぶん早く泳ぎましたけれども、どうして、泳ぎの太郎には叶ひません、しまひには氣をいらつて、其足で太郎を巻き付け様としましたけれど、もうすん／＼行つてしまつて、とう／＼太郎の勝になりました、萬歳々々と言ふ聲が方々から聞えます。「章魚君サア約束だ。返したまへ早く」と申すと、章魚ももう降参をしてしまつて、それから夜も輝く奥御殿へ行つて乙姫様にお話をして二郎を連れて来てくれました。「ヤア二郎さん」「アツ兄さん」と二人は抱へ合つて喜びました。そこで太郎は二郎を抱へたまへで泳ぎまして章魚を始め鯛鰯鯉などを、みんなに送られて、もう／＼お家に歸りました、そして乙姫様から感心な兄弟だと言つて下さいました。金銀珊瑚など立派な寶物を澤山持つて歸つてお土産にしましたとさ。めでたし／＼。